

武蔵野



武蔵野支局 〒180-0006
 武蔵野市中町1の13の1 3F
 電話 0422(51)3131
 FAX 0422(51)3133
 musasino@yomiuri.com
 都内版編集室 電話03(3217)1465・1466
 江東支局 電話03(3631)6116
 立川支局 電話042(523)4477
 ホームページ
 www.yomiuri.co.jp/local/

購読は
0120-4343-81

【広告】読売Palette
 03(6272)9027
 【折込チラシ】 0120-03-4343
 【読売旅行】 03(5550)0666

3月19日(土曜日)
 旧 2月17日<赤口>

あすの暦

通日 78
 月齢 16.4 (正午)
 日出 5.47
 日入 17.52
 月出 18.53
 月入 6.24
 満潮 5.43
 干潮 11.51
 (大潮)

伝承に耳を傾け続け

文人の
 武蔵野

ラフカディオ・ハーン(1850~1904年)は、多言語を聴き分ける耳を持つ作家です。生まれはギリシャのレフカダ島(「レフカダ」は「彷徨う」の意で「ラフカディオ」の由来)、父はアイルランド人(当時は英国籍)、母はギリシャ人で、フランス語と英語で教育を受けて、アイルランドのフォークロア(民間伝承)に接し、単身で渡米して新聞記者として活躍。やがて作家となることを決意し、カリブ海のマルティニーク島での取材を開始。2年間を過

小泉八雲 ④



八雲が没した大久保にある小泉八雲記念公園の胸像。大久保はいま異文化が共生する街となっている(新宿区で)

ごし、クレオールの民話や音楽、料理を採取し、本を書きます。中国語も学びました。1896年に小泉八雲となり、武蔵野の文人として「雪おんな」を書く前から世界各地の怪談、奇談に触れ、翻訳に携わり、口頭伝承の再話を行っていました。複数言語を解するだけでなく、言語の音楽性、文字の絵画性、ことばの階層性を聴き分ける耳も持っていました。民族音楽を採

譜し、武蔵野の虫の音を音楽として愛でました。日本の地震を経験し、「FUSUMAMI」を知り、村人にいち早く津波の襲来を伝える「稲むらの火」の伝承を書いた「A Living God」(生き神様)もまたハーンの耳から生まれています。松江、熊本、神戸を経て、東京では市ヶ谷富久町の家から本郷に通い、夏には家族で焼津に滞在しました。西大久保村に移住してからは怪談の再話に取り組み、早稲田に通う日々の中で、1904年、急逝します。当時の大久保は、「武蔵野の傍」が至るところに認められる新聞地であり、文士の集う村でした。八雲逝去の3年後には国木田独歩も転居してきます。終生の地となる大久保は、異文化が混濁する武蔵野でした。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「ラフカディオ・ハーンと日本の近代」

(牧野陽子)

米国の対日戦略と占領政策に役立ったとされるラフカディオ・ハーンの著作ですが、同書は比較文学的な楽しみ方を教えてください。ハーンの記事は、日本とは何かと問いかけ、その意味を読む者に考えさせるとして、内外の文人とハーンを比較考察しながら「日本」を考える論を進めています。



(新曜社)

「もしもの時」喪主がやること

解説付き
 100項目

